

磯鶏館山遺跡

—昭和63年度発掘調査報告書—

1990.4

岩手県宮古市教育委員会

The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

序 文

宮古市内には、私たちの先人達によって築き上げられそして守り受け継がれて来た大切な文化遺産である遺跡が数多く確認されております。その中には、当時の貝類や魚骨・獣骨などの自然遺物を広範囲に含む崎山貝塚をはじめとする縄文時代の貝塚遺跡や岩手県沿岸部では初めて発掘調査された長根Ⅰ遺跡の奈良時代の古墳群など貴重な遺跡が数多くあります。

磯鶏館山遺跡は、港湾埋立のための土取工事などに伴いその本体部分の大半は消滅してしまいましたが、昭和59年から61年度の3ヶ年にわたる事前の発掘調査の結果、中世の城館跡としての遺構の外に縄文時代、平安時代の竪穴住居跡や古代・中世の製鉄鍛冶遺構、近世の遺構など質・量的にも貴重な資料を検出しています。これらは、まさに、宮古地方のみならず沿岸地方の歴史研究上必要欠くべからざるものとなっております。

今回の発掘調査は、前回の土取工事をまぬがれて残った南側丘陵部の一部で、県立宮古短期大学開設に伴い拡幅整備されることとなった市道工事に伴うものであります。

調査の結果、平安時代の竪穴住居跡1棟のほか段状遺構2基などが確認されました。また、平安時代の土器である土師器・須恵器などの遺物も出土しております。

最後となりましたが、今回の調査に際して多大なるご協力・ご援助を賜りました関係者の皆様方に厚く感謝申し上げます次第であります。

平成2年4月

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

例 言

1. 本書は昭和63年度に実施した磯鷺館山遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査の主体は宮古市教育委員会（教育長 小野寺聰→保坂純三→佐藤勇逸）で、発掘調査は高橋・盛合が担当し、本書の執筆・編集は高橋・鎌田が行った。
3. 調査座標は昭和59年～61年度に実施した調査に設定したものをそのまま使用した。座標は、平面直角座標第X系を座標変換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためにRを冠して表示した。

座標軸方向——第X系に準じる

調査座標原点——X - 41600.000、Y + 96600.000

4. 高さは標高値をそのまま使用した。
5. 土層観察に際しては、『新版標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄）を参考とした。
6. 本文中の引用文献の略称は次のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会刊行）
1983～86 『宮古市遺跡分布調査報告書1～4』 武田将男→『分布調査1～4』
1986 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男→『分布図86』

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	
1. 過去の調査について	1
2. 調査に至る経過	3
3. 調査の概要	3
4. 調査体制	3
II 遺跡をとりまく環境	
1. 位置と周辺の遺跡	4
2. 地形・地質と遺跡の立地	4
III 調査内容	
1. 調査区の設定及び層序	8
2. 遺構・遺物の検出状況	8
3. 検出した遺構・遺物	10

挿図目次

第1図	位置図	2
第2図	位置と周辺の遺跡	5
第3図	地形分類図	6
第4図	調査区全体図（A区～C区）	7
第5図	調査区全体図（D区～I区）	8
第6図	調査区断面（A区～I区）	9
第7図	第1号竪穴住居跡、第3号段状遺構	11
第8図	第1号竪穴住居跡出土遺物	12
第9図	第2号段状遺構	14

写真図版目次

第1図版	調査区遠景、近景
第2図版	調査区（A区）、（C区）
第3図版	第1号竪穴住居跡、堆積状況
第4図版	第1号竪穴住居跡遺物出土状況、第1号竪穴住居跡と第3号段状遺構
第5図版	第3号段状遺構、堆積状況
第6図版	第2号、3号段状遺構、第2号段状遺構堆積状況
第7図版	出土遺物

I 調査経過

1. 過去の調査について

磯鷄館山遺跡は、昭和58年度に実施した市内の遺跡詳細分布調査によって発見されたもので、翌年の昭和59年度から61年度までの3ヶ年にわたり、港湾埋立用土砂採取に伴う事前の発掘調査が実施されている。現在の所、未だ発掘調査報告書は刊行されていないためその結果は未報告となっているが、以下その概要について記す。

発掘調査は、土取場の対象となった約88,000㎡について実施されたが、この調査終了後の磯鷄館山遺跡はその本体部分が消滅し、わずかに南側の高浜、八木沢地区に通じる丘陵部を残すのみとなっている。

検出した遺構・遺物は、年代・種類とも非常に豊富で多岐にわたっているため、ここでは年代ごとに記述する。

〈縄文時代〉 全体的にみれば縄文時代の遺構・遺物は少ない。竪穴住居跡が1棟精査されている。

〈平安時代〉 尾根上や斜面上に多数の遺構を検出している。竪穴住居跡25棟、土壇跡9基、道路状遺構3、製鉄鍛冶遺構4などであるが、竪穴住居跡は山の頂部をはきんで東側と西側にわかれる。

〈中世〉 城館跡に伴うもので、掘立柱建物跡10軒、空掘り跡、土橋跡、井戸跡などの遺構のほか、中国産の青磁、国内産の陶磁器類、渡来銭、小札など多様な遺物を出土している。

〈江戸時代〉 炭焼窯跡、溝跡、整地跡などの遺構や陶磁器類などの遺物を出土している。

以上、各年代ごとにその概略を記したが、中心となるのは平安時代の集落跡と中世の城館跡としての遺構・遺物である。

平安時代の集落跡は、東側と西側に分かれているが出土土器の詳細な分析などは行っていないため、時期的にかけ離れているのか近い時期なのか、あるいは同時併立なのかは把握していないが、西側の集落跡では鉄に関わる遺物・遺構が多く出土しているが、東側の集落跡ではそのようなものがあまり出土しておらず貝類や獣魚骨などの自然遺物を包含する土壇跡が検出しており、より日々の生活に密着したものが出土している。このような事からも、生業形態の在り方や集落の立地・役割など当時の社会・文化を解明するためには貴重な資料であると思われる。

中世の城館跡としては、所在する位置や地形、検出した遺構などから、居館跡という性格よりも砦という役割を担った城館跡と考えられる。実際、標高50m程の平場からは、櫓跡と思われる掘立柱建物跡が検出しており、ここからの眺望も宮古湾の湾口部から中ほどまで一望でき、まさに、見張場として恰好の場である。

いずれにしても、以上の様な多種多様な要素、情報を含む遺構・遺物の本報告が早急に望まれるものである。



第 | 図 位置図

2. 調査に至る経過

磯鷄館山遺跡は、宮古市大字磯鷄第11地割字岸ノ前、第8地割字中谷地に所在し宮古市遺跡コードL G34-2155として登録された周知の遺跡である。

本遺跡を含む当該地区は、平成2年4月に開校する県立宮古短期大学や県立高校、市立中学校、国立海員学校などの文教施設が集中するところであり、ここ数年のうちにその景観は、大きく変ぼうしている。

今回の調査は、県立宮古短期大学に至る既存の道路を拡幅整備することに伴い実施したものである。発掘調査は、宮古市建設課の委託を受けて宮古市教育委員会が主体となって行った。

3. 調査の概要

発掘調査対象面積	555㎡
発掘調査期間	平成1年3月9日～3月29日
室内整理作業	平成2年2月1日～3月31日
検出した遺構	平安時代の竪穴住居跡1棟のほか所属時期不明な段状遺構2基
検出した遺物	平安時代の竪穴住居跡から土師器・須恵器の環、甕や遺構外からマイゴの羽口片などの遺物が若干出土している。

4. 調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査総括	吉田 昌義	宮古市教育委員会社会教育課長（平成元年度議会事務局へ移動）
	摺待 保典	” ” （平成元年度社会教育課長に）
事務担当	小本 哲	” 社会教育係長
”	箱石 憲市	宮古市役所建設課庶務係主事
調査員	高橋憲太郎	宮古市教育委員会社会教育係主事
”	鎌田 祐二	” ”
”	盛合 義信	” ” （主担当）

調査の実施にあたり、次の各位から多大なる協力をいただいた。（敬称略）

〈発掘調査〉	村岡憲一、伊藤晴男、佐々木茂、古館友三、菊池清八、神林信吉、大越貞蔵、山本寛、中村福右エ門、佐々木清、菅原テルミ、藤谷晶子、佐伯裕則、吉田昭
〈整理作業〉	古館友三、佐々木茂

II 遺跡をとりまく環境

1. 位置と周辺の遺跡（第1図、第2図）

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し北緯39°29'49"～39°43'23"、東経141°45'20"～142°04'44"までを市域とし総面積338.64km²をはかる。市内重茂半島の鯉ヶ崎は、本州最東端部にあたる。

磯鶏館山遺跡は、閉伊川河口より南へ約2km、宮古湾東岸より約500mの磯鶏地区の背部に位置する。『分布調査1～4』及び『分布図86』などから周辺の遺跡分布状況を見ると、本遺跡の周辺部には、縄文時代から中世にかけての遺跡が多く分布している。

本遺跡のすぐ北側に流れる八木沢川を越えた丘陵上には、縄文時代の貝塚遺跡で屈葬人骨1体が発掘された磯鶏蝦夷森貝塚や昭和62年度に発掘調査された上村貝塚などが分布する。上村貝塚は、岩手県埋蔵文化財センターにより調査がなされ、縄文時代中期の竪穴住居跡や宮古市内では初めて確認された弥生時代の竪穴住居跡のほか、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが検出している。また、出土した遺物も縄文・弥生・奈良・平安時代とバラエティに富み、質・量ともに豊富で特に、各年代の土器以外にも縄文時代の人骨や翡翠製の大型垂飾品など注目されるものも多い。

本遺跡の西側の尾根上に立地する島田遺跡（現在は県立宮古短期大学が建っている）は、昭和60年度に発掘調査されておりその結果は、『中谷地・島田遺跡』にまとめられており、平安時代の集落跡である。

更に本遺跡から西へ約1km強の所には、八木沢川を隔てて南北に八木沢古館、八木沢新館の2つの館跡が築かれている。これらが、本遺跡に関連するものなのかは不明である。

2. 地形・地質と遺跡の立地（第3図）

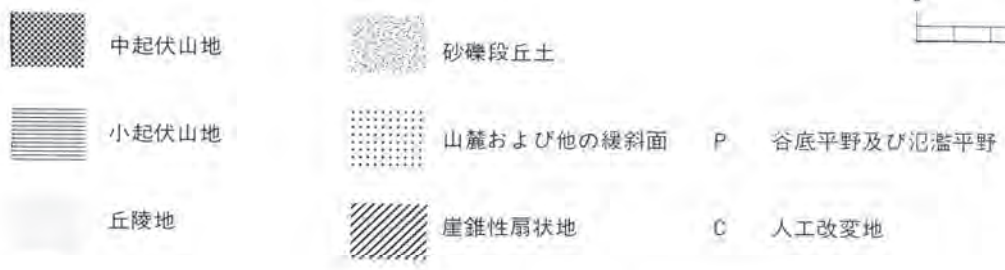
磯鶏館山遺跡は、地形的には西部から続く中・小起伏の山地帯（花輪山山地）の縁辺を取りまく様に形成された丘陵（八木沢丘陵）の東端部に立地する。遺跡の西～北～東の周囲三方は、標高3～6mの低湿平野に囲まれており島状に独立した丘陵部である。ただ南側の方は、八木沢、高浜地区へ至る尾根が連なりそのまま山地帯に通じる。島状に突き出た部分は、前述の通り港湾埋立の土砂採取などの工事によりすでに消滅している。

地質的には、中生代に侵入した花崗岩（宮古花崗岩体）が基盤をなしているが、この花崗岩体は硬質な部分もあるが、道路法面などに露出した部分は風化作用を受けてもろく崩壊しやすくマサド化している。

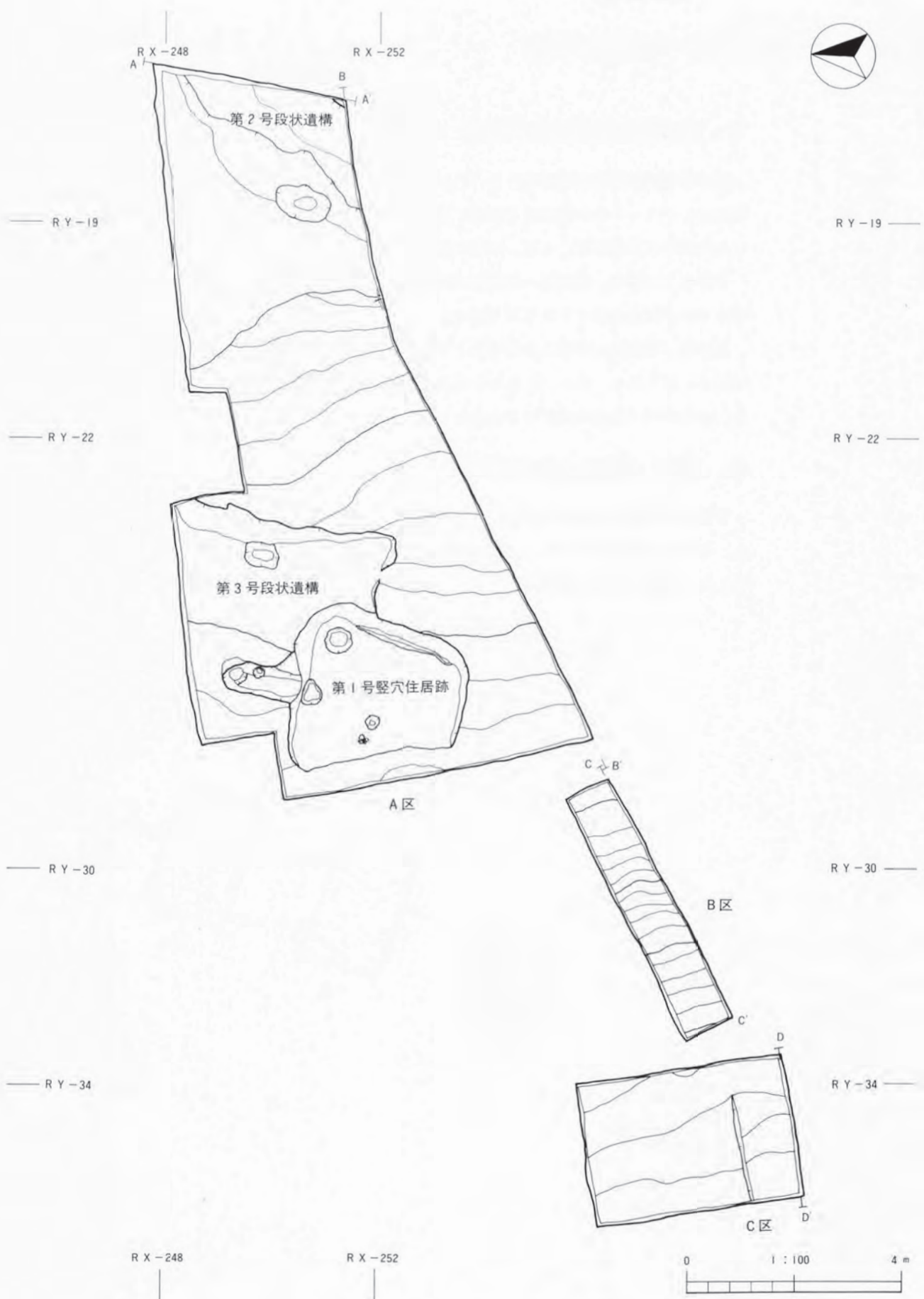
今回の調査対象区は、すでに消滅した島状に突き出た丘陵部と南側の尾根部に連なる地点で、南北に伸びる尾根から続く緩斜面である。



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 地形分類図



第4図 調査区全体図 (A区~C区)

III 調査内容

1. 調査区の設定及び層序 (第4図～第6図)

調査対象区が道路拡幅分だけで、しかも東西に細長いことから、斜面傾斜のゆるやかな地点を選定しグリット状の調査区を設定し遺構・遺物の有無を確認した。

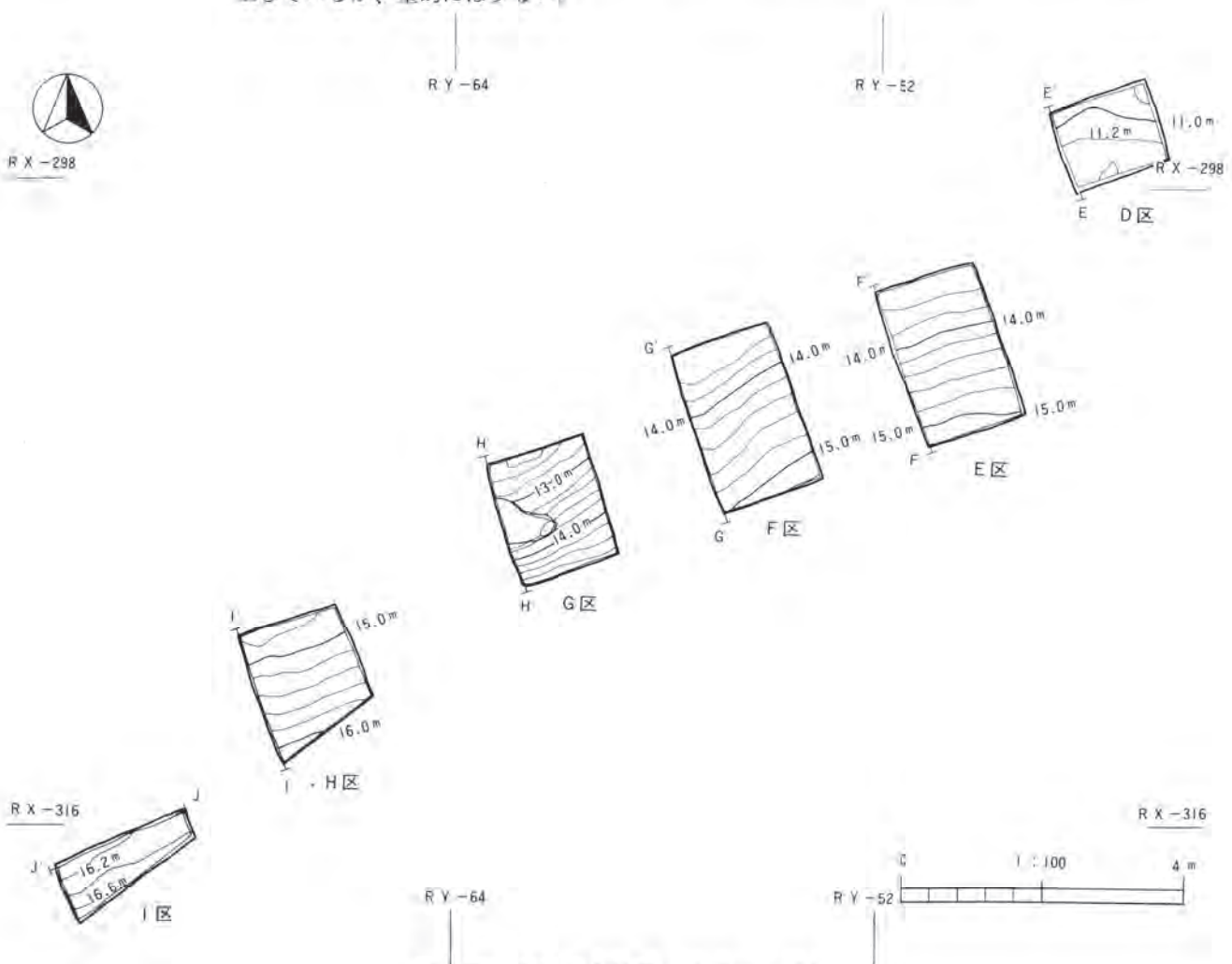
地山面に至る層序は、I層、II層に分けられる。

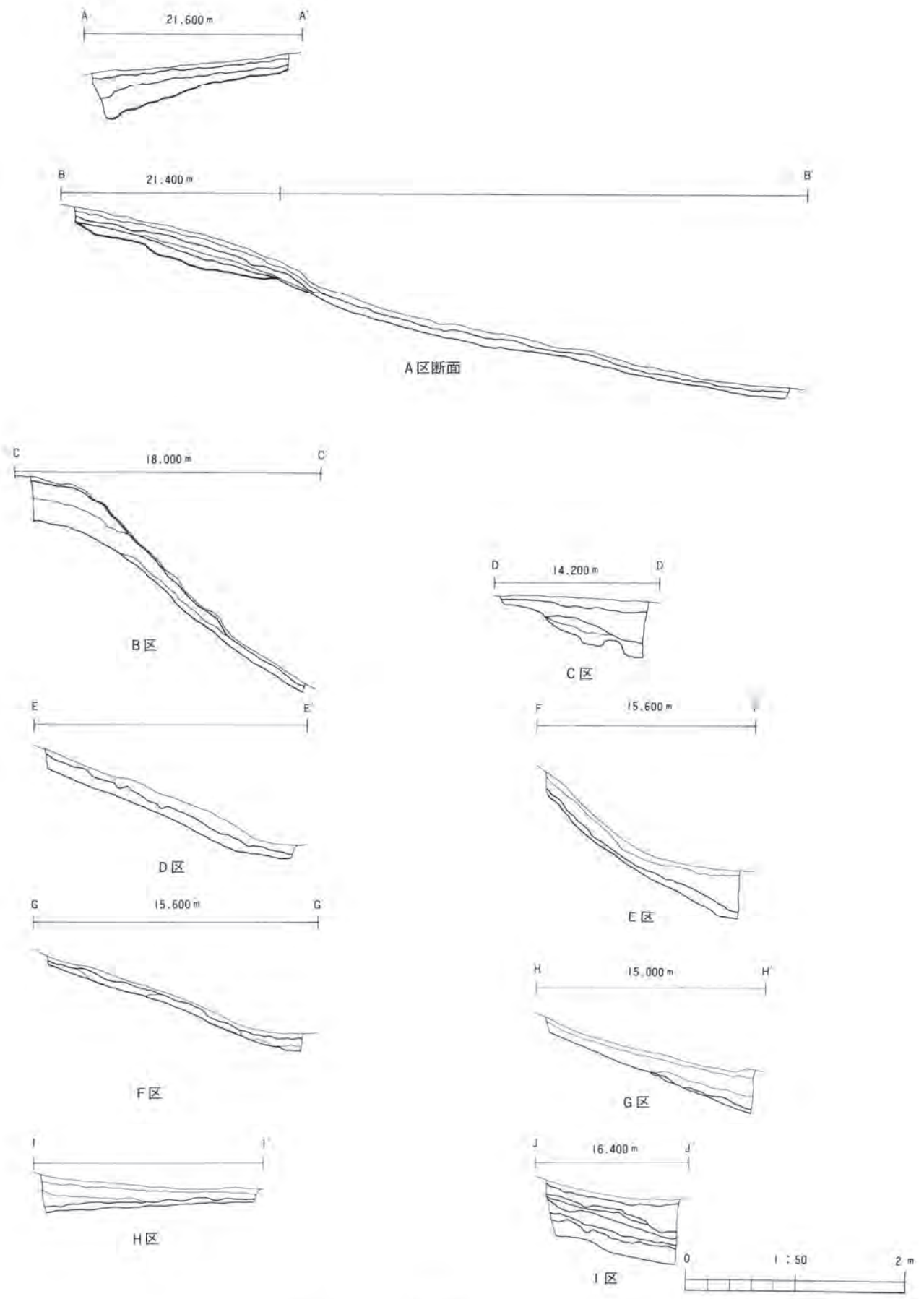
I層は表土層で、暗褐色～黒褐色の腐葉土層である。全く固さ、しまりはない。斜面傾斜のゆるやかな地点程厚くなるものである。

II層は、暗褐色の砂壤土を基本土とするもので褐色や黒褐色を呈する砂っぽい土を塊状に比較的多く混入する。固さ、しまりはあまりない。I層同様に傾斜のゆるやかな地点では厚くなる。須恵器や土師器の破片などを含む。

2. 遺構・遺物の検出状況

平安時代の竪穴住居跡及び時期不明の段状遺構などの遺構は、傾斜のゆるい東端部で検出され、それ以外の西方のグリットには遺構・遺物は確認できなかった。遺物は、遺構を中心に出土しているが、量的には少ない。





第6图 調査区断面 (A区~I区)

3. 検出した遺構・遺物

第1号竪穴住居跡（第7図）

A区の西側

調査区A区の西側に位置し、第3号段状遺構と重複するが新旧関係は不明である。

平面形

平面形及び規模は、西壁～南壁の一部にかけて斜面部に立地するために流出しておりその全容を把握できなかったが、残存部から一辺が約3mのほぼ方形を呈するものと推定される。壁は、床面から幾分傾斜しながら立ち上がり壁高は、東壁側で0.5mをはかる。カマドは、北壁中央部に存在する。また、東壁側には周溝が認められた。

埋土

埋土は、A層、B層、C層、E層、F層、G層、K層に分けられこのうちG層は周溝の埋土、F層、K層はカマド崩壊土層である。A層は、黒褐色の砂壤土を基本土とするものでA₁、A₂層に細分される。A₁層は、A₂層よりも明るい土でやや固くしまっている。A₂層は、東南部に堆積するもので炭化物粒を多量に含む炭層である。B層は、竪穴の中央部から西壁側に広く堆積するもので、やや赤味があった褐色の粘性を有す埴土を基本土とする。焼土を多量に混入する。C層は、カマド付近を中心とする北壁側に堆積するもので、明るい褐色の砂壤土を基本土とする。地山のブロックを多量に含み、比較的固くしまっている。E層は、東壁際に堆積するもので暗褐色の砂質の強い砂壤土を基本土とし、やや固さ、しまりをもつ。E₁～E₃層に細分される。E₁層は一番暗い土で砂質の褐色土、黒褐色土を多量に含む。E₂層は一番明るい土で黄褐色の砂塊や暗褐色の砂質土塊を多く含む。E₃層はE₁、E₂層に比べて混入土の割合が少ない。F層は、カマド崩壊土の焼土層である。G層は、暗褐色のシルト質埴土を基本土とするもので固さ、しまりが全くない。

床面

床面は、ほぼ平坦面で貼床などは認められない。床面上には、P₁、P₂のピットを検出した。P₁は、直径0.5mの円形を呈する浅い皿状のピットでカマドの東脇に位置する。P₂は、直径0.25cmの円形を呈する小規模なものだが、柱痕跡が認められる柱穴で床面のほぼ中央部に位置する。ほかに柱穴は確認されず具体的な柱穴配置などは不明である。

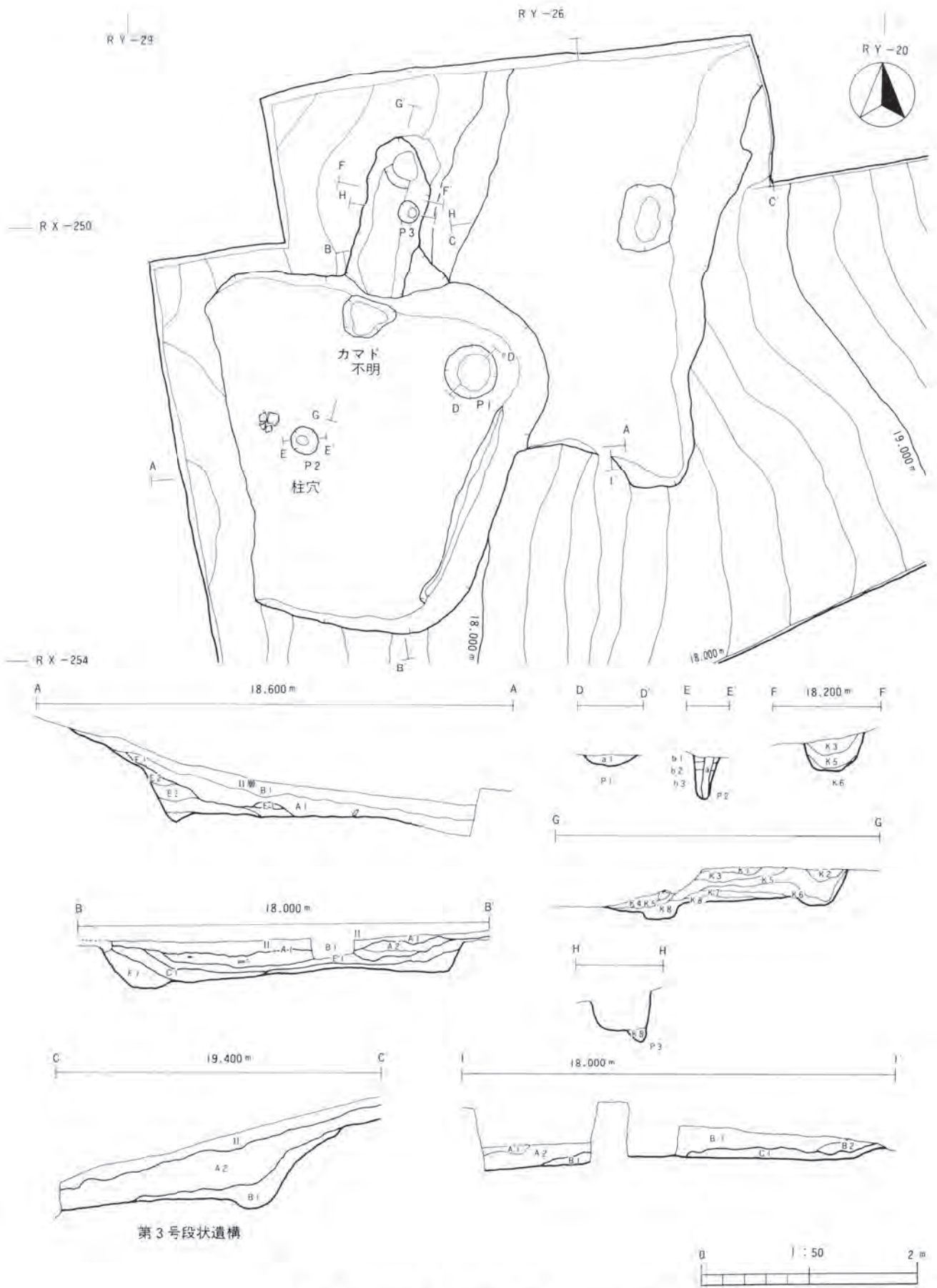
カマド

カマドは、北壁の中央部に存在するがカマド袖部や燃焼面などは確認できず、わずかに0.45×0.35mをはかる浅い不整ピットと煙道部が残っているだけで、カマドの構造などは不明である。カマドの崩壊土は、K₁～K₈層に細分されるが、K₁、K₂層は暗褐色の砂壤土を基本土とするやや固さ、しまりをもつもので、直接のカマド崩壊土とは異なる可能性がある。K₃、K₆層は、粘性の強い褐色の砂壤土を基本土とするもので、地山ブロックを多く混入する。K₄、K₅層は、焼土を多量に含む層で暗褐色のかなり粘性の強い砂壤土を基本土とする。炭化物粒を少量含む。K₇層は、暗褐色～褐色の砂壤土を基本土とする。K₈層は、黄褐色のマサド土層で地山ブロックを多量に含む。

煙道部は、北側に約1.5m程のびており煙道底面はほぼ平坦面でU字形の断面を呈する。煙出し部は、円形状に幾分深く掘り込まれている。また、煙道内に直径0.1m程の小規模なピット（P₃）を検出したが、詳細は不明である。

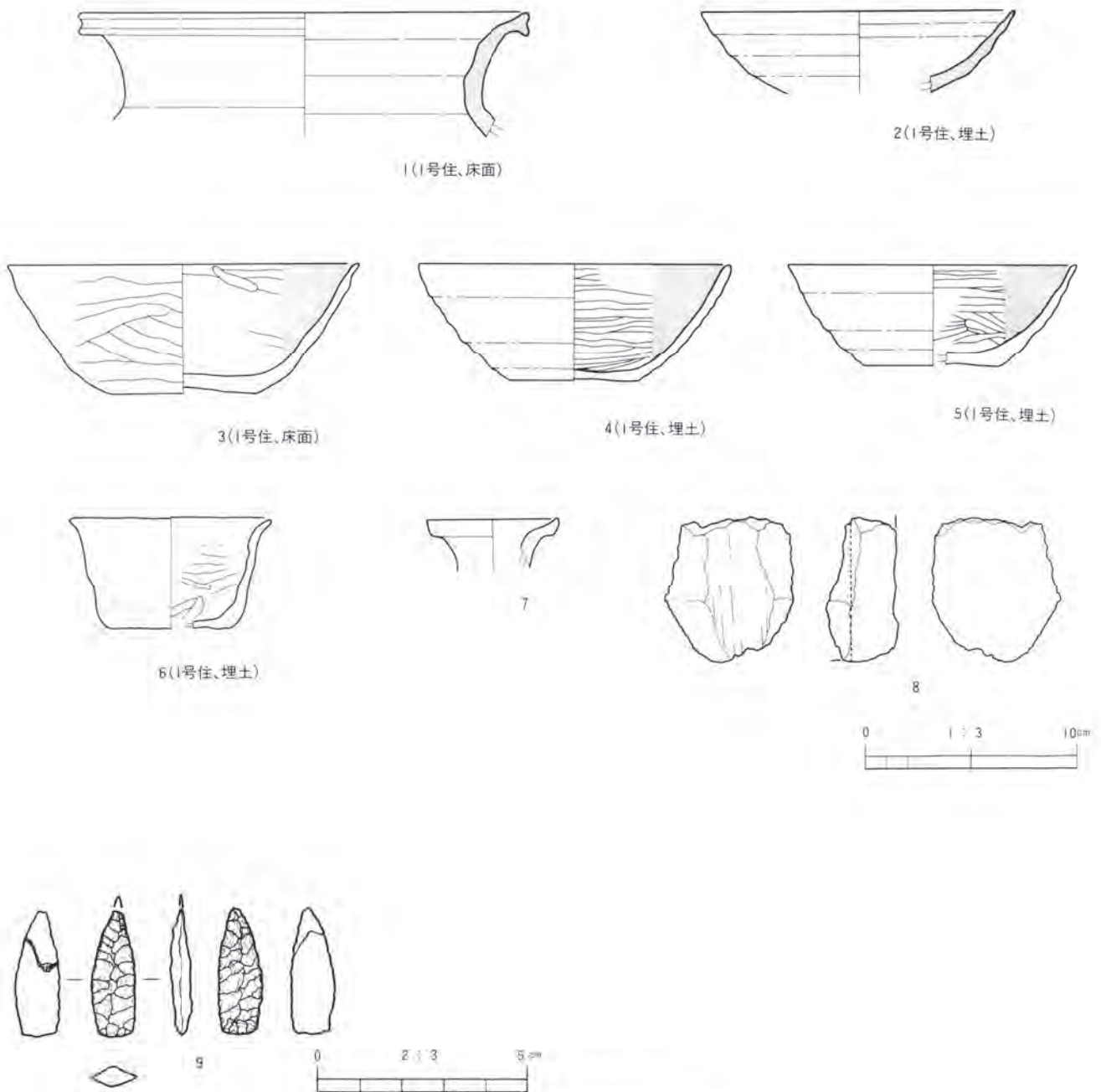
出土遺物

遺物は、土師器の坏や須恵器の坏・甕などを出土しているが、量的には多くない。第8図1～6までが当竪穴住居跡から出土したものである。1と3が床面出土であとは埋土中から出土したものである。1は須恵器の甕の口縁部で、口縁部が大きく外反するもの。ロクロ目以外の



第7図 第1号壑穴住居跡、第3号段状遺構

調整痕は認められない。2は須恵器の坏で底部を欠くもので、口径15cmをはかる。器形的には、体部から口縁部にかけて外傾するもので、口縁部上端は薄くなりそのままぬける。3～5は、ロクロ成形後に内面黒色処理の施された土師器の坏である。3は口径16.7cm、底径7.0cm、器高6.2cmをはかるもので、外面は底面から全面にわたりヘラケズリ、内面は黒色処理後ヘラミガキが施されている。4は口径14.7cm、底径6.0cm、器高5.5cmをはかるもので、底面は糸切り離し後縁辺部をヘラケズリを施している。5は口径13.6cm、底径6.3cm、器高4.8cmをはかるものである。6は土師器の坏だが、底部から口縁部にかけて直線的に立ちあがる器形となるもので、口径9.5cm、底径6.0cm、器高5.3cmをはかる。口縁部は上端が短かく外反する。内面にはヘラミガキが施されている。また、内外面の一部に炭化物が付着しているのが認められる。



第8図 第1号竖穴住居跡出土遺物

第2号段状遺構（第9図）

A区東端部に検出した。地山を削平し平坦な面を作り出す遺構であるが、平面形や規模は不明である。

壁は非常にゆるやかに立ち上がり、中ほどにわずかな段を有している。また、壁は尾根の等高線に沿って弧を描きながら南西～北東方向へ走っている。しかし、平坦面の外縁はこれとは平行せずに西側へ広がって行く。壁の下端に不整形の落込みが伴う。

平坦面（底面）はほぼ平坦であるが、あまり固くはなく貼床などは認められない。調査区内での平坦面の幅は1m～3.5mを計る。

埋土はA層のみで、黄褐色砂壤土を基本土とし、にぶい黄橙色の地山ブロックや褐色砂壤土などをやや多く含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。

出土遺物は平坦面上より土師器製の破片が数点出土しているが図示できるものはない。

第3号段状遺構（第7図）

A区西半部に検出した。第1号竪穴住居跡と重複するものの新旧関係は不明である。調査区内に東西2.2m、南北4.2mを計る。

壁はゆるやかに立ち上がる。

平坦面（底面）はほぼ平坦で、あまり固くなく貼床は認められない。調査区内での平坦面の幅は1.7m～2.2mを計る。

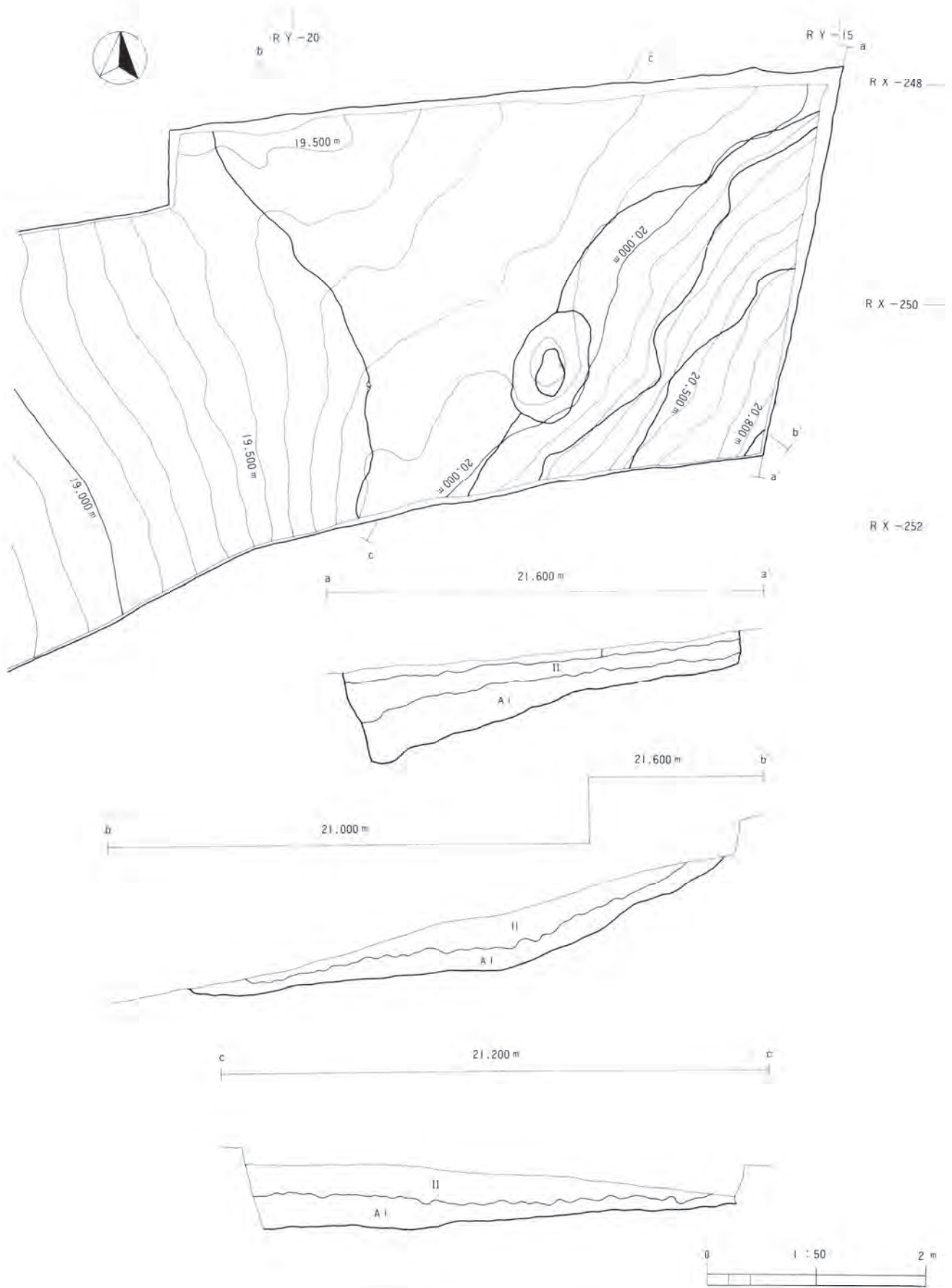
埋土はA層、B層、C層に大別される。

A層は褐色砂壤土を基本土とし、にぶい黄褐色砂壤土をやや多く含む。固さ、しまりとも中程度である。B層は黄褐色砂壤土を基本土とし、褐色砂壤土を含む。やや柔らかく、ややしまりがない。C層は明黄褐色砂壤土を基本土とし、褐色砂壤土や黄褐色砂壤土をやや多く含む。やや固いがあまりしまりがない。

出土遺物は無い。

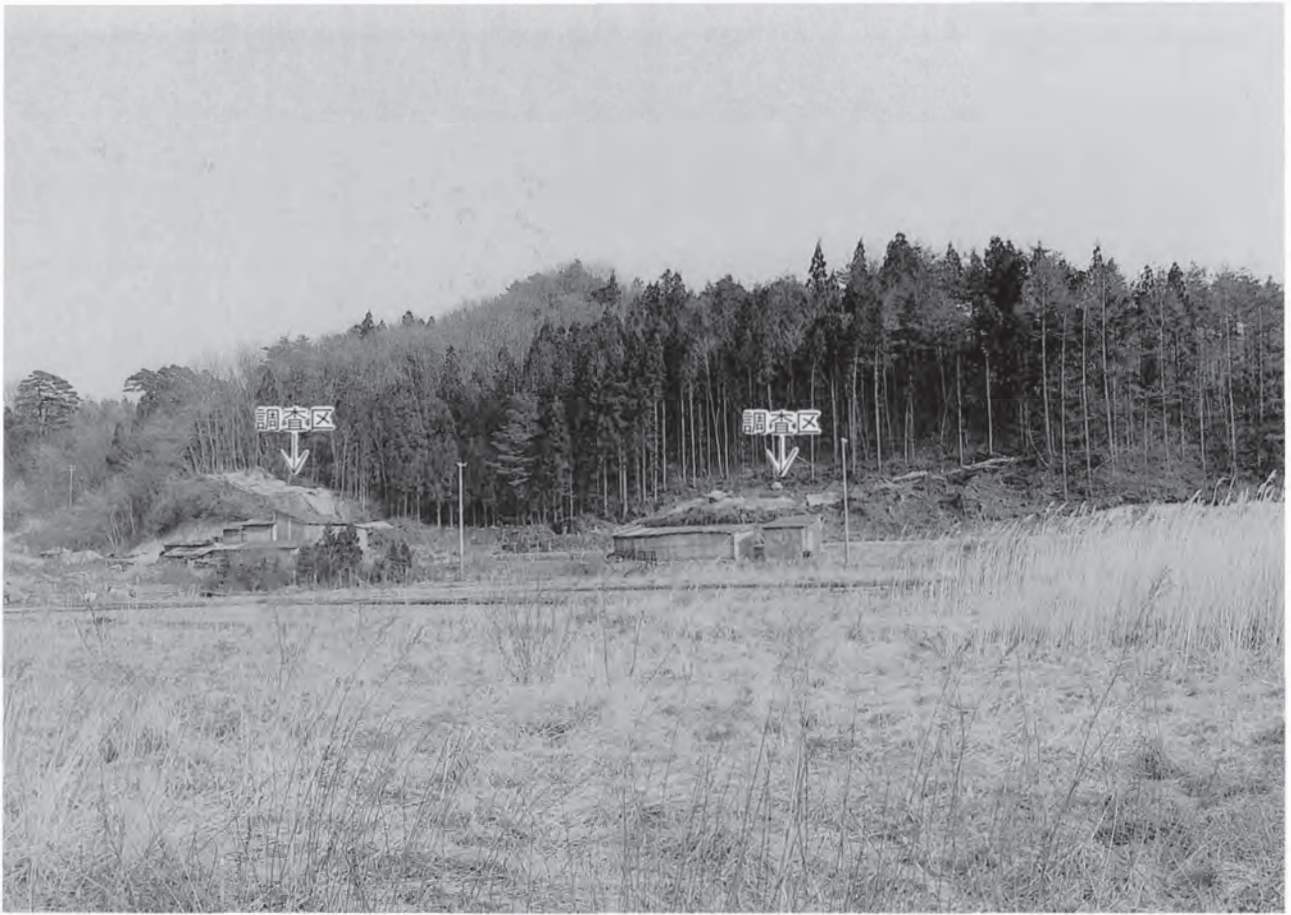
遺構外出土遺物（第8図）

7は赤焼き土器壺の口縁部破片である。8はA区から出土したファイゴ羽口である。9は石鏃であるが、平基で側縁がやや膨らむ。使用中に欠損したものをアスファルト等の接着剤を使用し補修している。



第9図 第2号段状遺構

写 真 图 版



調査区遠景



調査区近景

第2図版



調査区 (A区)



調査区 (C区)



第1号竖穴住居跡



第1号竖穴住居跡堆積状況

第4図版



第1号竖穴住居跡遺物出土状況



第3号段状遺構

第1号竖穴住居跡

第1号竖穴住居跡と第3号段状遺構



第3号段状遺構



第3号段状遺構堆積状況

第6図版



第2号、3号段状遺構



第2号段状遺構堆積状況

第7図版



第1号竖穴住居跡
第8図3



第1号竖穴住居跡
第8図4



第1号竖穴住居跡
第8図5



第1号竖穴住居跡
第8図6



遺構外出土
石鏃



出土遺物

宮古市埋蔵文化財調査報告書24

磯鷄館山遺跡

—昭和63年度発掘調査報告書—

1990.4

発行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印刷 株式会社文化印刷
岩手県宮古市大通2丁目5の2